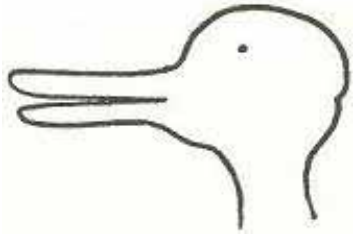
フィロソフィア、４

先週の授業のとき、私が黒板に描いた絵は、あまりにすばらしすぎて、みんなにはよくわからなかったかも知れないので、ここにネットからとったものを乗せておきます。



〔A〕ジャストロウの図形

〔B〕ルビンの壷

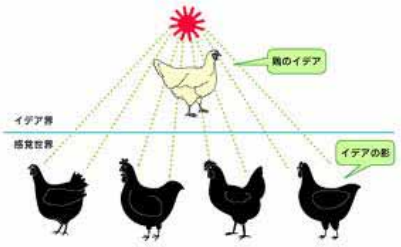
さて、この図形を紹介したのは、イデア論の一つの論拠となる、「想起説」を説明するためでした。想起説とは、「人間がものを知るのは、新しくゼロから出発するのではなく、実はすでに知っていたのだが気がつかなかったことを思い出すのだ」という説です。〔A〕のジャストロウの図形を見ると、あるときはウサギに見え、あるときはアヒルに見えるが、それはウサギとアヒルを知っているからであって、もしアヒルを知らずウサギだけを知っている人がいたら、その人にはウサギとしか見えないでしょう。すなわち、この図形を見て「ウサギだ」とか「アヒルだ」とかわかる（知る）ことができるのは、この図の微妙な線の曲がり方などを知った結果ではなく、だいたいの形を見ると**すでに知っていたアヒルなりウサギなりを思い出すのだ**、というわけです。これと同じように、私たちが何かものを知るというのは、実際はすでに知っていたことを、その対象を見ることがきっかけとなって、思い出すに過ぎないのだ、と言うのです。

人がものをどのようにして知るのかという問題は、大きく分けて二つの理論があります。一つが、プラトンのように、外の世界との関わり合いから得られるのではなく、外にあるものがきっかけになるにしても、内にすでにある知識が明らかになるのだ、という考えです。１７世紀前半のデカルト（1596~1650）は、この考えを広め、その基本的考えに沿ったライプニッツ（1646~1716）などもこの路線で、近代には合理論と呼ばれます。

それに対して、人の知性は、最初は「（何も書かれていない）白い板」で、外の世界に存在する物を目や耳などの感覚が知覚し、そのデータ（色や形や音や匂い）をまとめることによって、物を知るのだという立場があります。プラトンの弟子のアリストテレスはこのように主張しました。近代になると、例えばイギリスのロック（1632~1704：『市民政府二論』という本で有名で、政治学者と思われるかも知れませんが、本職は医者でかつ哲学者）などが、そのように主張します。ただし、上に言ったデカルトやロックなので近代の哲学者は、知るという行為が理性から出発するか、経験（感覚的知識）から出発するかは別にして、根本的に人間は外の世界を正確に知ることができないと主張します。それに対して、古代ギリシアや中世ヨーロッパの哲学者は人間が外の世界を知ることを疑わない常識的な人々です。この対立する二つの見解については、また後でゆっくりお話ししたいです。今は、これは結構難しい問題だということだけ言っておきます。

プラトンに戻りますが、想起説を唱えることとイデア説はどういう関わりがあるのでしょうか。想起説を認めたなら、「でも、すでに知っていたとはいつどこで知ったことなのか」という疑問が起こるわけで、それに対してプラトンは、「人間の魂は生まれてくる前にイデアの世界に暮らしていた。そこであらゆるものの本当の姿（イデア）を見ていたのだ」と考えたようです。

あの最初に挙げた「だまし絵」を再び見てください。これらの絵を見ていると、想起説の他に、人間のものの知り方の特徴がいくつかわかります。一つは、人間が知ると言うことは、いったい何を知ると言うことなのでしょうか、という問題です。〔A〕の絵を見る人が知ったことは何でしょうか。見ているウサギの絵なのか、それとも別のウサギという頭に描く像なのか。私たちが〔A〕の絵を見るとき、確かにそこに描かれているものを知ります。しかし、それが「ウサギだ」と言うとき、実は頭に描いているのは、目で見ているウサギの絵ではなく、別のウサギの像ではないでしょうか。これと同じように、ドラマで坂本龍馬を演じる俳優を見るとき、私たちはどこかの本で見た写真に写っている坂本龍馬を思い出しているのではないでしょうか。すなわち、私たちが目や耳などの感覚で知るものは、本物の像であって本物自身ではない、本物は別のところにあるイデアなのだ、というのが、プラトンのイデア論なのです。



第二点は、だまし絵には二つのものが同時に描かれているのですが、ジャストロウの図形では「ウサギだ」と思うときはウサギしか見えない。アヒルだと思うときはアヒルしか見えない。ルビンの壷でも、「壷だ」と思うときは壷しか、「二人の人が向き合っている」と思うときは人の顔にしか見えません。ということは、人は一度には一つのことしか知り得ないということになります。これは「音楽を聴きながら勉強する」ということは不可能であることを示しています。そうする人は音楽を聴いているか、勉強しているかのどちらかなのです。つまり、本当に勉強しているなら、音楽は耳に入っていない。逆に音楽を聴いているなら、勉強していないのです。ナイターを危機ながら勉強をしていた私には、それが真実だと自信をもって断言できます。

第三点．人がものを知るという行為には、受動的だけでなく、積極的（能動的）でもあるということです。能動的と受動的について少し説明します。能動的とは他の物に影響することで、受動（受け身）的とは他の物から影響を与えられることです。人間の行為というものは普通は能動的です。つまり、自分以外のものに変化を与える。例えば、何かを作るとか、壊すとか。受動的な行為（というより変化という方が正しいかも）とは、別の人や物から影響を受けることです。たとえば手術を受けることや、傷つけられることなど。では、知るとは能動的なのでしょうか、受動的なのでしょうか。

このことを理解するために、粘土に像を押しつける行為を考えましょう。粘土の上に判子を押しつけると粘土の上にその判子の形が残る。この場合、粘土は別に自分からは何の行動もしません。つまり、まったく受動的です。しかし、知ると言うことはぼやっと目を開いているだけでは成立しない。あのジャストロウのだまし絵をぼやっと見ているだけでは、アヒルもウサギも頭には描かれない。「これは何かな」と知りたいと思う気持ちをもって眺めないといけない。だから授業をぼやっと聴いていても、あるいは黒板の板書をただただ写していても、それは知ったことにはならない。「先生は何を言っているのか」に注意を集中しわかってやろう、理解してやろうという意気込みをもって聴かなければ、いかによい授業をしても、何も知ることはできないのです。

他方、教える方もわかりやすい授業をすることが必要です。教える人、あるいは何かの情報を伝える媒体（本でもテレビの番組でもかまわない）がなければ、こちらがいかに知りたいと思っていても、知ることは不可能です。だから知ると言うことは、受動的な面と能動的な面の二つがあると言えます。

次回の授業はアリストテレスです。この人は万学の祖と言われた大学者です。幅広い学問について体系的な説明を試みた人なので、心して授業に出てください。それではまた。